

第拾回全國酒類品評會審査に就ての所感

菊正宗醸造元 技師長 阿部 澤次郎

這般第十回全國酒類品評會(日本醸造協會主催)の開催せらるゝに當り兵庫縣地方(灘)より株式会社本嘉納商店菊正宗醸造元技師長阿部澤次郎氏が榮ある審査員として克く其の重任を全ふせられて歸難せられました。就ては早速該審査中に於ける御所見又は御感想等に關し幾多興味深き有益なる御話を承はり度再三再四伺ひましたが審査の内容に就ては一切公開せざる規約に依り遺憾ながら茲に詳言し與はれど自分の感想と將來の希望とにつき二三述べ様とて甚だ有益なる御高見を拜聽しましたので掲載する事と致しました。(文責記者に在り)

今回の出品は清酒に於て四千二十二點であつて十月十一日より約參週間に亘りて慎重嚴正なる審査を行つたのである。審査の大體は所謂官能的酎酒法に依り第一審より第七審に至り先づ第一次審査は五日間を要し全數の五割五分を鑑別撰擇した。次に第二次審査は一週間、第三次審査は五百點弱となり之れを二日間、第四次審査は前者の約半數を、第五次審査は第四次審査の半數を、第六次審査は第五次審査の時と同數を酎酒法に依つて、第七次審査は總括的に優劣順位に配列して第四次審査以降各一日宛に審査したのである。

當初自分は斯る數多の出品物を而も連日に涉りて良く酎酒し且つ果して健康が之に耐はれ其の重任を全ふする事を得るや否やを非常に懸念したのであつた、夫は灘五郷の春秋二回に行ふ品評會に於て僅か三百點餘の清酒を一週間許りにて酎酒する際にも既に非常なる努力を要し徴かなる疲勞さねも感じたからである。然るに愈々今回の品評會の審査をして見ると案外豫想に相違し單なる杞憂に止まり口中の味覺も大して疲勞せず體力も餘り衰へた様にも感せられなかつた。想ふに之は出品物全體として比較的甘口性の清酒が多數であつたからであらう。即ち何れかと云へば女性的のものであり下戸黨向きのものであり色澤は淡麗であるが一方には極論せば清酒飲料水に辛味を附した様なもので口荒れのしなかつた爲め今若し之れが全く反對に灘酒の如く比較的辛口であり男性的上戸黨向きの酒質ならば非常な苦痛を感じた事であらう。

茲に於て自分は審査採點に非常なる當惑を致したのである。夫は標準を如何に定むべきかの問題であつて、會の方針としては全國の標準を採る主旨である關係上全國各地方より即ち中國、九州、大阪、兵庫、名古屋、秋田、東京等より各審査員を撰

定したる事を見ても了解が出来る。然し克く熟考するに趣味嗜好上東京には東京獨特のものあり大阪にも亦大阪自身の夫れあり且つ又地方には夫れ々地方的色彩を帯びたる特有があつて一定の統一すべき標準が示されないものである、故に止むなく此の位の所だろうと勝手に定めて審査するより外に良策はなかつたのである、扱て自分は審査後總括的に考へ品評會に就ての鄙見を思ひ浮ぶまゝ述べる事とする。

今般の審査に於ける酒類を通覽するに品質は一般に優良溫和にして香氣芳烈、風味も亦醇良にして殊に其の色澤淡麗なる點に讚美するものである尙之を技術上の見地より觀る時は如何に苦心慘憺したる結果の賜物であるかを想像し誠に敬服する所がある、然し一步退いて之を想ふ時其處に又大なる疑問を生ぜざるを得ないのである、成程今回の出品物は一般に美麗溫和にして口當り至極圓滿のもの多く掬すべきものもあるも他面如何にも女性的であり甘口的である、之を爛して飲み飽きのせぬ快く酔ひ又快く酔の覺め得るものであるか否かを疑ふのである。即ち之を市場に賣出す時果して多數の人の嗜好に適し而も多量に快飲し能ふ事が出来るであらうか、之を俗例にて申せば茲に頗る附きの美人あり一瞥する時は誰が見ても美人であらうが、扱て此の美人果して佳い女であり得やうか往々にして其の美人でも久しきに渉る時は反て倦嫌されるものあるを見る、此の俗例は不幸にして清酒に於ても適合する事あるを悲しむのである、品評會に於て優秀なる成績を得たからとて其の藏の酒を商品としての醇良酒と公言する事が出来るやうか。名聲と實質との相伴はないやうな酒は決して眞の優良酒とは云はれないのである。

仄聞する處に依ると或る地方の酒造藏に於て原料米の精白に吾人の想像も及ばざる缺減を與へ又清酒貯藏に於ても非常なる犠牲を拂ふて居ると云ふ事である、例へば夏期に於て桶の周圍を水で冷却し温度の高まらざる様に夏期の経過をとり恰も病人に氷枕や冷罨法を施したやうなものがあるとか寔に心細い極みである。反之寒風凜々たる冬は強健なる活躍に確乎たる基礎を築き上げたる偉丈夫の眞夏の酷暑にも痺ます堂々鐵腕を振つて活路を擴めて居るが如きものと實に雲泥の差があるやうに思はれる。即ち前者は清酒としての眞の行程を履ます正しき軌道を通らざる脱線的のものであると云つても敢て過言にあらず、又一面之を考察する時は斯る多くの費用を投じなければならぬ酒造方法を行ひ、採算に合はざる經營方法を繼續する時は遂に之を小にしては個人の資産を傾倒し又大にしては國家の産業上莫大なる損失を來し實に産業の發達を阻止する由々しき一大事ではなからうか。

先日(十一月廿五日)恒例に依り酒造着手前に於て杜氏及び従業員等に本酒造年度に於ける方針と酒造期間中の諸注意要項を述べし席上序を以て全國品評會審査の總括的意見を述べ併て該品評會に於ける優等酒を取出し『之を参考に迄喇酒する様に』と提供せしところ當菊正宗の主人公の曰く『いや之を参考にして貰ふと甚だ困る單に見る丈に止められたし』との注意あり、

寔に言外に意味あり所謂参考とは取捨撰擇の自由を與へるの意味なるを悟り即時にこの失言を訂正せざるを得なかつた。

單に目に見る色なりと参考にせられよと附言した様な次第である。要するに眞の醇良酒は多くの人に愛せられ尙飲み飽きのせず多量に飲まれ克く酔ひ、克く覺める經濟的優良なる製品であつて而も商品でなければならぬと思ふ。此の點に於て多少品評會其のものゝ價値に疑問を生せしめらるゝのである。

自分は強いて品評會を否定するものではないが前述の事情より考ふ時我國清酒釀造發達の上に於て地方の舊釀を墨守し品質の向上に意を用ひざりし釀造家に吟釀の覺醒を促す警鐘の響となり由來可なりの貢獻をなし來りしは寔に感謝に絶えず同慶の至りであるが之がため又反つて餘りに品評會に意を注ぐ結果一種の品評會狂病に罹り從て品評會酒の品評會となりつゝあるの弊害を伴ひ幾多の犠牲を拂ひ不生産的虚偽の標本を造らんとするが如き現状は甚だ憂慮すべき問題ではなからうかと思ふ。

然らば如何にして此等の弊害を除き得るかと思ふ。

(一) 先づ出品點數に對する各藏の造石單位を増量せしむる事である、即ち現今では同一清酒十石に對して一點の出品をなし得るのであるが爾後は最低一百石位とし尙其れにても缺點のある虞あれば貳百石參百石と單位を上げればよいと思ふ、斯くすれば到底經濟的に遂行し得ず彼の氷枕や冷罨法も出来るものではなし總て脱線の貯藏法も防止する事が出来るかと思ふ、此の時人或は曰く『夫は大酒造家の言にして小酒造家を困却さす一方法ならむ』と又『同一品質物が斯く多量に出來與ふものにあらず』と、然し之は甚だ矛盾した議論であつて小釀造家であれば皆石吟釀をなせばよし同一の酒質となすべし若く夫れが出來能はぬものならば其の技術を賞讃する價値が何處にあるか夫れならば品評會の審査を止めて最初より富籤を引いて優位順を定めた方が或は合理的ならむ。

(二) 次に審査の標準に就て考ふるに各地方に於てその嗜好に變化あり一地方に於て優良なるもの必ずしも他地方に於て歡迎を受けず例へば辛口を好む處あり甘口を好む處あり又地方に依りては今尙木香を好愛する處あり全く嫌ふ者あり、依つて思ふに審査の際も焼酎に於けるが如く先づ大體清酒『メートル』或は『ゲールサック』比重計により大體三大別とし其の各に於て優劣審査を附するも一方法かと思ふ。例へば『ゲールサック』比重計に於て零度以下、零度以上三度迄、三度以上の如く各其の特徴に於て大體の標準を定むれば審査も容易となる、或は亦云はん幾千もの出品物に對して甚だ煩鎖であると然し審査は絶

對的に公平平等を以て主眼とする以上人爲的に爲し能ふ限り最も嚴正且つ忠實に出品者の苦心を體して審査すべきである若し僅かの手數や勞力を嫌忌するならば寧ろ品評會を中止する方が宜しからむ。

(三) 審査員を毎年新しく變更するのも一方法かと思はれる、即ち會の方針として全國各地方より審査員を集め全國的に公平を期すると云ふ意の存在する所より考ふるも至當の事であろう、同一審査員が毎年半數又は其れ以上審査に加はる時は遂にその人の嗜好が毎年品評會審査に定結せる癖となり甚だ善からざる缺點となるからである、今假りに若し毎年各審査員を一變する時は毎年異りし特徴を品評會の上に劃時代的に表はし其の平均を觀る時は茲に公平なる一の標準を視ふ事が出来るのである

(四) 次は各地方々々で豫選を行ひ其の選抜せられたる優良品を中央に送り出して審査するのも變つた方法で恰も甲子園原頭に於ける中等學校野球大會の夫れの如き方法を探るも亦興味多からぬ。然し嚴格なる嗜好上の意味より云へば地方々々に於てその地方の趣味嗜好による品評會を開き中央に於て審査する事なく地方の嗜好を尊重して置く事が至當の様に思はる。

最後に尙審査員とても神ならぬ身の時には相違せる批判を與ふる事が無きにもあらず例へば十二―三點の品を十組にして十四五名の人が處を異にして審査を行ひし時に皆各處に於て同一の點數は入れ難きものであるのみならず全く正反對の奇現象を呈せし時などあり況んや咧酒する時に在つては絶對的に正確は期し難いものであり又口中の疲れるも當然である。故に茲に於て比較的甘口の酒は良く咧酒される長所があり酒造家もかゝる審査員の弱點を狙つて所謂品評會向きの清酒を別醸する様な傾向が生じたのではないかとも思はれる。

然し酒造家も今一段の覺醒に依りて單なる品評會酒の吟醸に腐心するの惡弊を廢して立派なる商品として廣く販路を開拓し得て充分採算に合ひ而も美味淡麗芳醇掬すべき優良酒を醸造して需要者に供給する事が當事者としての義務では無からうかと思ふ尙ほ品評會に優秀なる位置を得たと云つて誇大なる廣告に依り同一品を市場に出し得ず謂所羊頭を掲げて狗肉を賣るの策は商業道徳上からも亦謹まねばならぬ事では無からうかと思はれる。(終)